

4 : LHサーージ直前の排卵前卵胞の吸引とその後の継続的な卵胞吸引による黄体不在の延長を利用した卵胞囊腫作出モデルの開発

獣医学科臨床獣医学講座 松井 基純

メールアドレス mmatsui@obihiro.ac.jp

研究の概要

【目的】

LHサーージ直前に排卵前卵胞を吸引することで引き起こされる、黄体不在の状況が卵胞発育に及ぼす影響を中期的（2から4週間）に観察するとともに、黄体不在の延長による卵胞囊腫化の仕組みを明らかにし、卵胞囊腫作出モデルの開発を目指す。

【方法】

黄体期中期に PGF2a 投与 36 時間後に超音波診断装置を用いて排卵前卵胞を吸引し、その4および8日後に再度卵胞を吸引し、黄体不在を延長し、卵胞発育の観察を行う。4日毎に超音波診断装置による卵胞発育の観察と血中ホルモン濃度を測定のための採血を行う。卵胞囊腫の形成された個体について、卵胞液を吸引採取し、卵胞液中のステロイドホルモン、成長ホルモン、IGF - I 濃度を測定する。

【結果】

黄体期中期にPGF2a投与36時間後に超音波診断装置を用いて排卵前卵胞を吸引し、その後4日ごとに卵胞吸引を行い、黄体不在を延長した結果、試験に供したウシの約5割において、卵胞の囊腫化が確認された。これらのウシでは、試験期間を通じて血中黄体ホルモン濃度は基底値であり、黄体組織の不在も確認された。

卵胞囊腫を示した個体に対し、囊腫化卵胞の吸引を行い、卵胞液を採取した。現在、それらのサンプルについて、ホルモン濃度などの測定を行っている。